

非合理性をいかに対象化するかは、社会学において極めて重大な問題である。(非合理性の復権)が唱えられて久しいが、これは社会学の創設期から問われ続けている。契約の非契約的要素(E・デュルケム)やカリスマ論(M・ヴェーバー)には、本来的に非合理的な要素への着目がみられる。

そもそも、人間と社会の相関関係を問う科学は、その関係の命題化を課題としている。関係の命題化は理論的な合理性により析出されるが、一方で実践的な合理性をも対象化せねばならない。だが、後者の合理性がいかに担保されるかは問題性を孕んでいる。

社会学のファウンダー達は、その担保として諸概念を捻出し、社会学の豊饒化を成し遂げた。ところが、例えばカリスマ論に引き付けていえば、それは非合理性を析出するために設定された、未成熟な概念ともいえる。この概念を、安易に日本社会の「教祖」や「職能的霊能者」に適応することは殆ど不可能な状況だ。科学的概念には、それと呼応する対象が先行しており、問いのアポリア

〈非合理性の復権〉の向こう側

大西克明

は常に存在する。

非合理性の「発見」は、既存の諸概念で対象化できないと察知されたとき、生成されるものだろう。日本の新宗教研究が展開したのは、西欧の学問体系では十分に概念化できない対象を研究者達が「発見」したからである。日本社会に通底する生命主義的な救済観を析出したのはその最大の成果であった。

合理性—非合理性は相対的なものであるから、生命主義的救済観の実践的合理性は、西欧の学問体系からは非合理的なものとして映し出される。この意味で、合理—非合理は螺旋的に円環するが、円環過程において、相互に諸概念と諸命題を付き合わせる必要がある。この作業には、自前の実証的研究が前提とされるのはいうまでもない。(非合理性の復権)を高唱する限り、この地味で地道な作業を遂行していくしかない。この営為が研究に値すると私は考えている。

(おおにし かつあき／東洋哲学研究所研究員)